世界は今

県人リポート 317

平野 稔さん（北上市出身） ブラジル

世相を映す大通り

自己主張の発信の場に

南米最大の金融ビジネス街、サンパウロ市のパウリスタ大通り。

美術館や緑豊かな公園、大ショッピングセンター等を有し、週末ともなれば国内外からの観光客が訪れる一大観光スポットであると同時に大小さまざまなイベントも開催され、1回の催しで100万人、200万人といった人出をのみ込んでしまう。

今月7日、大イベントの一つ「ゲイパレード」がそれこそ華やかに開催された。19回目となる今年のテーマを直訳すると「私はこんなふうに生まれ、こんなふうに成長し、これからもずっとこのままの自分。どうか認めてください」だ。

大音量をとどろかす街宣車の上や路上では、ど派手な衣装をまとい（ほぼ裸の人もいるが）、すさまじいまでの化粧を施した「主役たち」が繰りなす数々のパフォーマンス。それを目当てに集まった群衆も一緒になって踊ったり、写真を撮ったりとそれはもうにぎやかの一言。カメラを向ければ笑顔でポーズをとってくれる自然さ。実に陽気で人懐っこい。今年も200万人以上の人出があったと翌日の新聞が報道した。

さて、今ブラジルは深刻な不況下にあり、国内各地での大規模な人員整理により結果、失業者や路上生活者が増加、収入減少、犯罪増加という悪循環。加えて公共料金の度重なる値上げと物価高。インフレ見通しは年28・4％に達し、石油公社の超大型汚職や政治家の金銭的搾取など、政治不信は、果てしなく膨らんでいる。さらに、異常気象による水不足、デング熱のまん延といった不安要素が追い打ちを掛ける。

昨年末来、ジルマ大統領への不満は、全国規模で民衆の「直接行動」を惹起（じゃっき）させた。このパウリスタ通りでも大規模な抗議デモが繰り返され、その模様は全世界に流れた。大統領のテレビ演説中には、アパートの窓から鍋釜をたたきつつ「ジルマ、辞めろ！」と繰り返し叫ぶ光景も。演説の翌日には株価と自国通貨が下落するという珍現象も起きた。

不思議はまだある。リオ五輪を1年後に控えながら話題が全く出ないこと。ホームパーティーや友人同士の飲み会、さらにはマスメディアでさえ五輪の「ご」の字が出ない。一体どうなっているのか？

昨年のサッカーワールドカップ（W杯）の際には資金不足（実際には政治家が開催資金を搾取）という理由で各地の競技場工事が遅れ、ボイコットが叫ばれたりもした。友人・知人、全く知らない人にも聞いてみた。「五輪も同様、やる意味が無い、興味すらない」との返答。日本とは大違いで、これも政治不信の表れなのだろう。

良くもあしきも、そんな気持ちを行動に移す大舞台がこのパウリスタ通りだ。抗議デモの回数とその人出が多いほど世相は悪い。お祭りイベントが多ければ、その逆。参加する人々の表情、しぐさ、叫びは「何かに怒り、何かに狂喜し、何かを訴えている」という、一人一人の自己主張なのだろう。

今回のパレードもしかりで、お祭り騒ぎとは裏腹に、彼らは何らかの自己主張を発信したのだろうと思う。

1本違う通りに住んで、毎日見慣れたパウリスタ通りだが、ここで生じる光景に日々接していると、新聞やテレビの平面的な「出来事報道」には無い、この国の「今」が垣間見える気がする。

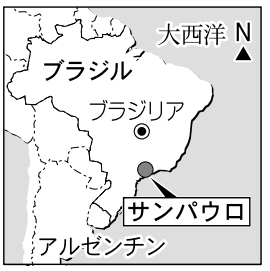
眠れる獅子といわれ、新興5カ国（BRICS）の一翼を担ったはずのこの国。起きざる獅子のままなのか、あるいはある日突然に目を覚ますのか。

悪い材料ばかりの今のブラジル。だが、底抜けに陽気なこの国の底力に、ひそかに期待せずにはいられない。

そしてきょうもまた、小さいながらデモが行進している。

（日曜日に掲載します）

サンパウロ市のパウリスタ大通りで開かれた「ゲイパレード」でパフォーマンスを披露する参加者



平野 稔さん（ひらの・みのる）黒沢尻北高―福島大卒。77年協栄生命保険入社。96年から同社サンパウロ駐在員事務所に5年半ほど勤務。03年に同社を退職し、サンパウロ市に移住。13年1月にサンパウロ市に本部を持つブラジル岩手県人会に入会。妻と2人暮らし。今回が「世界は今」初原稿。60歳。北上市新穀町生まれ。